園庭の恵みがもたらす暮らし

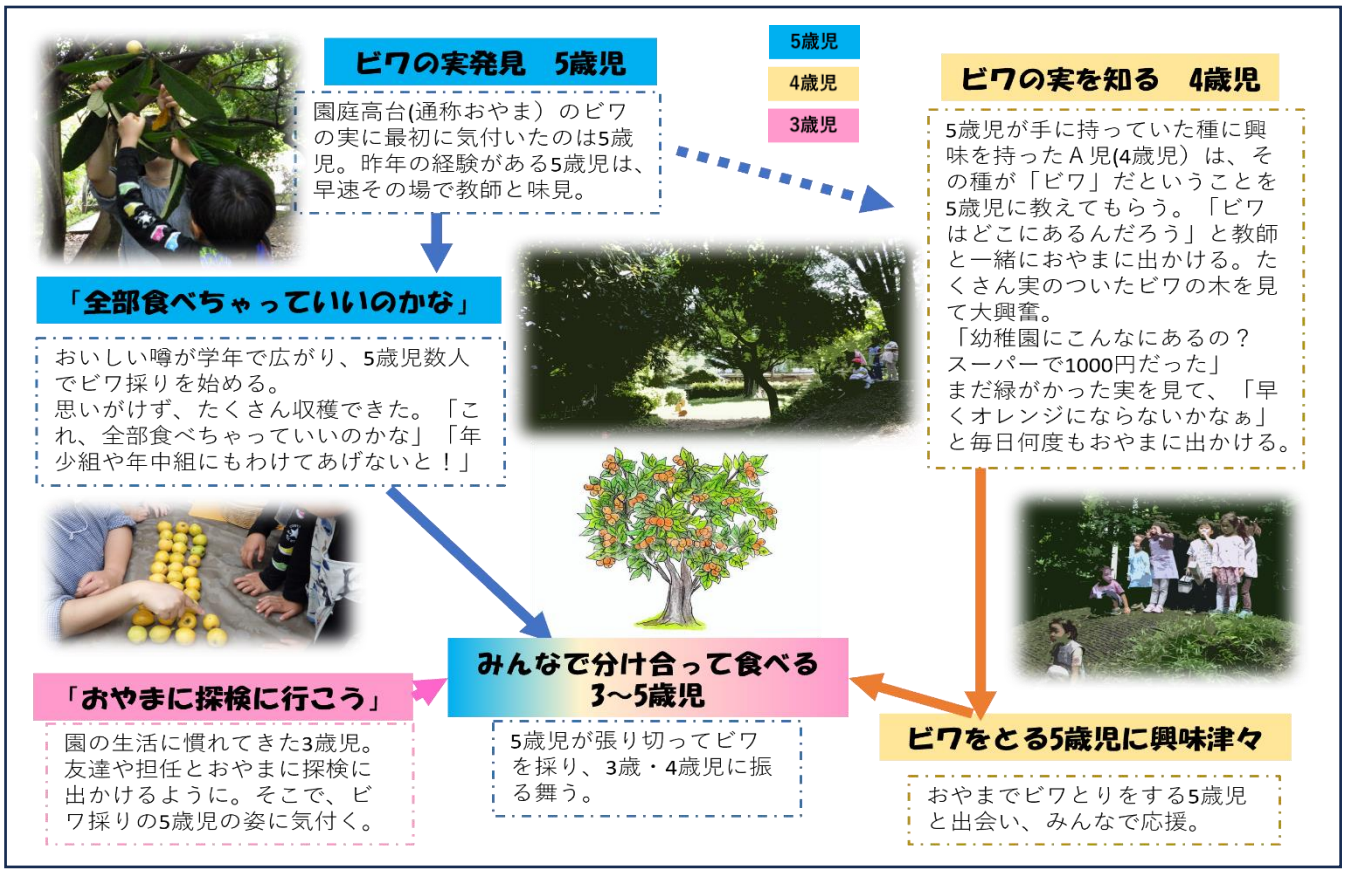
◆企画：佐藤寛子(附属幼稚園)
実践：伊藤綾子・佐々木麻美・佐藤寛子・杉浦真紀子・田村郁・灰谷知子・谷地理沙・渡邉満美
髙橋陽子(附属幼稚園)

◆はじめに

4 月に新しく入園してきた子どもたちも、少しずつ園の暮らしに慣れてきた 5 月半ば、園庭の高台（通称：おやま）のビワの大木がたわわに実をつけた。ビワの実をめぐる子どもたちと私達教師の関わりの過程を振り返り、コンピテンシー育成の観点から考察を試みることとする。

◆活動・遊びのプロセス

＊おやまのビワの発見～みんなで食べてみる　　2023．5 中旬～2023．5 月下旬



【考察】

園庭高台(通称：おやま)のビワの実に最初に気付いたのは、やはり 5 歳児だった。昨年の 5 歳児が夢中になってビワ採りをしていたこと、それを分けてもらって食べたことを覚えていた彼らは、今年は自分たちで採ろうと挑戦し始めた。ビワの木の枝はよくしなる。最初は、手の届く枝を取ってひっぱり、たぐり寄せては実を採っていたが、そのうちに、木登りの得意な人から登り始め、採るようになっていった。最初こそ、ビワ採りを楽しんでいた 5 歳児数人で収穫し、その場で食べていたようだが、採ることが楽しくなり、どんどん採り始めると、思いのほか、たくさん採れてしまった。「このまま全部自分たちで食べてしまっていいのだろうか」と 5 歳児自らが思い始め、3・4 歳児に分けることにしたのは興味深い。「園の恵みは、みんなで分け合って食べる」というのも、子どもたちが生活の積み重ねの中で獲得していった感覚だ。

一方、5 歳児の持っていた種がビワだと知ったＡ児が、4 歳児では最初にビワに興味を持った人だった。4 月に入園したＡ児は、新しい環境に戸惑い、やや所在なげに過ごしていた。おやまのビワの木にたくさんの実がなっている、それが、母親と一緒に買い物に出かけた先で見た、パック入り 1000 円のビワと同じ果物であることに気付く。「（自分の通う幼稚園に）あのビワが、しかも、こんなにたくさんあるんだ」と知ったＡ児の本当に嬉しそうな表情が忘れられない。それから毎日、おやまに出かけては、ビワが色づくのを今か今かと待ち続けた。家と園とをビワがつなぎ、所在なかったＡ児に、園で過ごす楽しみが生まれた。教師もクラスの他の子どもたちも、Ａ児と一緒に、毎日おやまに出かけては、ビワが色づくのを楽しみに待つようになった。ビワを巡って、子どもたち同士の関わりも生まれていった。

保育室を拠点に過ごしていた３歳児も、この頃、おやまに出かけてみたいという気持ちが膨らんできて、教師と一緒にやってくるようになった。３歳児、４歳児にとって、のびのびと過ごす５歳児の動きは刺激的で、ビワ採りを始めた５歳児の姿に興味津々。じっくりと見つめる姿が印象的だった。そんな３・４歳児の憧れのまなざしもまた、５歳児がビワ採りに夢中になり、採ったビワをみんなで分け合って食べようという気持ちへといざなったのであろう。

＊もっと食べたい！～もっと採ろう！～どうやったらもっと採れる？　　2023．５月下旬～6月中旬

5歳児
4歳児
3歳児
教師

もっと食べたい

5歳児にご馳走になった3・4歳児、甘いビワの味を知り、「もっと食べたい」と5歳児にお願いする

3・4歳児に頼まれ、張り切ってビワを採り始める5歳児。けれど、せっかく採ったビワが、地面に落ちて割れてしまったり、木の高いところにあってなかなか採れない。

「もっと採りたい！」だけど･･･どうする？

あの道具を使ってみるのはどうかしら？　教師のアイデア

子どもたちの思いを受け、教師間でも話し合い。以前、大きなイチョウの木にブランコを取り付けるために作った「道具」と、落ちたビワを受けとめるための「シーツ」を用意しておき、子どもたちに伝えるタイミング゛を待った。

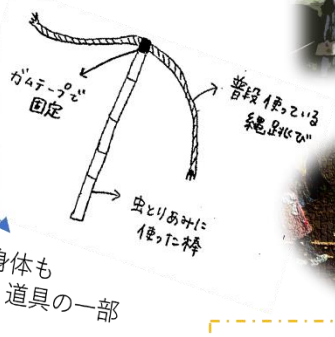
子どもたちは、ビワが割れないように、地面に落ちる前に受けとめられるものを探しに保育室へ。持ってきたものは、おままごと用の布団と手のひらにのせて持ってきた小さな綿。びわの木の下で、受けとめようと構えてみたものの、受けとめられず「小さいね…」とつぶやく。

ここで、教師から提案

教師提案の道具によって採れるようになったものの、この道具は子どもたちだけで使うには重すぎた様子。

道具を使って採る

道具を自分たち仕様に作り替える



びわを採り続けていたB児(5歳児)は、後日、自分が使いやすい新たな道具をつくりだした。

長い棒の先端に、普段使っているロープ縄跳びをつけたもの。

その道具を持って木に登り、それを使い、さらにびわを採り続けた。

3・4歳児もお手伝い

5歳児を応援していた3・4歳児も、これならできそうだと、シーツを持ち、教師と一緒に落ちてくるビワを受けとめた。

【考察】

5歳児を中心にビワ採りに夢中になり、子どもたちは、収穫したビワをみんなで分け合って食べた。初めてビワを口にした子どもたちもあり、大きな種に驚いたり、実の色づき具合によって、甘さや酸っぱさが違うことに気付いたりしていき、「もっと食べたい」という気持ちが膨らんでいった。おやまの大きな木の実をみんなで分け合って食べるというのも、子どもたちにとっては特別な楽しみになっていったように思う。

友達と声をかけあい、協力して採り始めた5歳児の姿や、5歳児に「がんばれ～！」「もう少し上！」などと、声援を送る3・4歳児の姿、そして何より「おいしいね」といいながら、友達と顔を見合わせ笑顔で食べる子どもたちの様子を見て、どの学年の教師も「もっと食べたい！」「もっと採りたい！」という子どもたちの思いを支えたいと感じていた。

「手の届かない高い所にたくさんあるビワの実をどうやってとったらよいか」、「採ったはいいが、地面に落ちると割れて食べられなくなってしまうのをなんとかしたい」というのが、子どもたちのビワ採りの課題であった。教師間でも話し合い、以前に別の目的でつくった道具が使えるのではないかと、物置から引っ張り出してきた。大きなシーツをみんなで広げて、落ちてきたビワを受けとめるのはどうかと、シーツも用意した。ビワの実は、おいしい時期が限られているし、期を逃すと、鳥たちが根こそぎ食べてしまう。そうした上手くいかなかった体験も子どもたちにとっては意味のあることだろう。しかし、今の子どもたちの気持ちの盛り上がりをできれば支えたい。いよいよの時には、教師から投げかけてみるのもいいかもしれない。いずれにしても、子どもたちの様子を見ながら、いつでも対応出来るようにしておこうと教師間で共通理解した。

子どもたちの課題解決のための発想は、教師の予想を超えるものだった。地面に落ちて割れてしまうビワのことを考え、子どもたちが用意したものは、保育室の人形用の小さな布団と、一握りの綿だった。いずれも柔らかいもので、ビワを優しく受けとめようと考えたに違いない。子どもたちの身体感覚、ビワに気持ちを寄せ、ビワの側からどうしたらよいかと考えていく思考のありようが興味深い。

また、教師が提示した道具によって、ビワはかなり収穫できたが、子どもたちにとっては、少々重く、自分たちだけでビワ採りをしたいと考えていた彼らの期待に充分に応えるものではなかったことも、注目すべき点であろう。子どもたちは、普段使っている縄跳びの縄と、竹の棒を使って、新たな道具を開発した。その道具を持って一人が木に登る。枝に棒をひっかけると、下にいる人が垂れている縄で枝をたぐり寄せて、見事にビワを収穫し始めた。まさに自分の身体も道具の一部とし、自分たちに扱いやすい、自分たち仕様の道具を作ったのだ。

おやまのビワがもたらした出来事は、よく考え、工夫しながら、仲間と協力し合って収穫する面白さ、みんなで味わうからこそおいしいという感覚、関わり合いながら過ごす園の暮らしの充実感を充分に味わう時間となった。子どもの思いを中心に、教師もまた考えを巡らし、知恵を出し合い、そして、大人の感じ方、考え方とは異なる、子どもたちの発想の豊かさに触れて心動かされる、教師にとっても学びの多い豊かな時間であった。

◆おわりに　コンピテンシー育成を視点において

5歳児が、おやまのビワを採ることに夢中になり、採ったビワをみんなで分け合い味わいつつ、もっと採るためにはどうしたらよいかと考え、工夫し、教師のアイデアも取り入れつつ、最終的には、自分たち仕様の道具を作り上げていく、その過程こそ、本学のコンピテンシーの定義である「課題を発見し知識やスキルを状況に応じて組み合わせるなどして、社会の場で成果を上げる包括的能力とその行動特性」の基盤となるものであると言えよう。

おやまの恵みであるビワの実をめぐっての、この一連の出来事には、さまざまな人の思いや行為が重なり実現していこうとする協働性、「たくさん採ったビワをみんな食べてしまっていいのだろうか」と園に暮らす他の人たちのことを感じて行動しようとする他者理解、そして、「高い所にあるビワをどうやってとろうか」「地面に落ちて割れてしまわないようにするためにはどうしたらよいか」と考える問題解決力など、子どもたちのコンピテンシーに関わる能力が充分に発揮されていることが窺える。

幼稚園の教育は環境による教育である。本園の恵まれた園庭の自然環境は、コンピテンシー育成の基盤になっていることは言うまでもないであろう。それに加え、子どもの思いを支え、子どもの思いから暮らしを始めようとする教師の関わりが、コンピテンシーの育成を支える大事な要素になるのではないだろうか。時には後から、時には横並びになって、子どもと共に感じ、考え、工夫しながら、彼らの身体感覚の深さ、柔らかさに学んでいく教師の姿勢が、子どもたちのコンピテンシーの育成を支えることにつながるのだと考える。